

リハビリテーション病院 画像診断部

中村伸治

概要

2023年4月高橋宏幸前技師長が退職され、久保行広副技師長が近森リハビリテーション病院担当になりました。2024年4月からは中村伸治が近森リハビリテーション病院担当になり、短い期間に担当が入れ替わり、多少の混乱はありましたが業務に支障はありませんでした。新型コロナウイルス感染症はある程度の落ち着きは見せたものの、感染者がぼつぼつと現れ、装置や補助具などの清拭や、換気に気を配る等の感染対策を行った。放射線機器は、16列CT装置はたまに立ち上げミスがある他、DVDドライブが故障し、定期点検時に修理交換してもらった。X線TV装置（一般撮影装置）は、撮影室内のモニターにノイズが入ることがあった。定期点検時に見てもらい、左右で部品を交換して、原因の同定をしている。検査数はVF、CTは減少。一般撮影は増加した。

検査件数

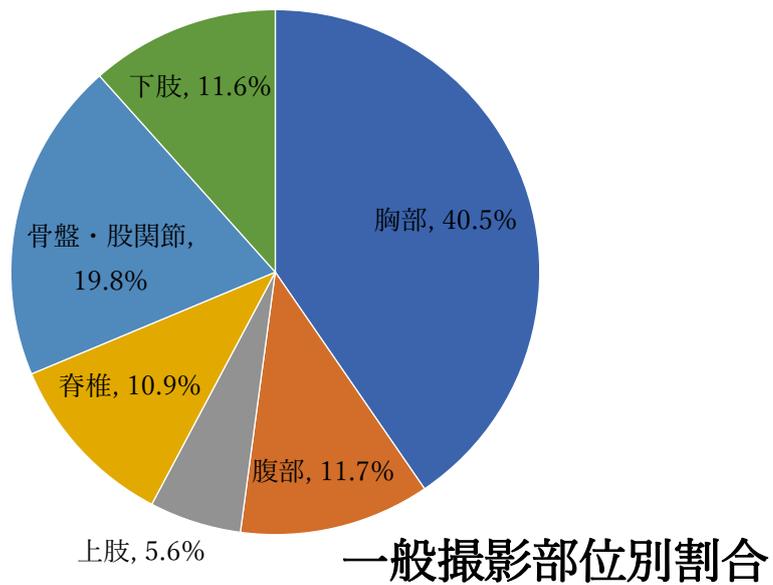
2024年の各検査件数における前年度比は、単純CTが-23.8%、嚥下造影(VF)が-12.1%、一般撮影が20.6%であった。表1に2020年から5年間の検査件数と図1に2024年一般撮影部位別の割合、図2に2024年単純CTの撮影部位別の割合を示す。2024年から整形の患者さんが増えて、一般撮影の件数並びに撮影枚数も増加したと思われる。

表1:検査件数

(件)

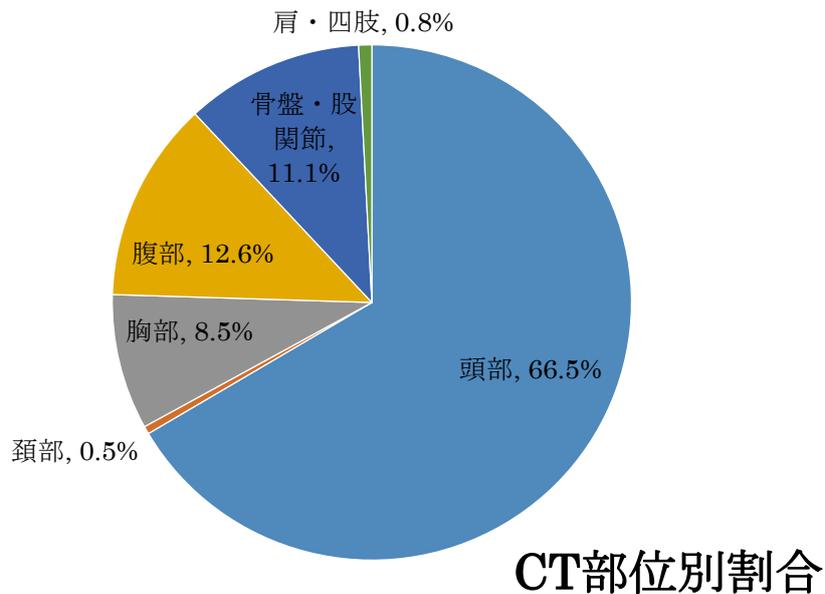
検査	年	2020	2021	2022	2023	2024	前年比
単純CT撮影		736	783	803	736	561	-23.8%
嚥下造影(VF)		473	544	390	321	282	-12.1%
一般撮影		1413	1522	1556	1509	1820	20.6%
(撮影枚数)(枚)		2370	2436	2740	2654	3511	32.3%

図 1



・件数は前年より 20.6%増、胸腹部が 16.6%減少し代わりに骨撮影が増加。
整形関係の撮影が増え、撮影枚数も前年比 32.3%も増えている。

図 2



・件数は前年より 23.8%の減、割合としてはほぼ変わらず。

放射線医療機器

16 列 CT 装置は、画像の荒れ具合により X 線管球の劣化の目安になる信号雑音比 (SN 比) をユーザー定期点検で毎月測定している。著名な定格低下は見当たらない。また、定期的な暖機運転を行うことで、X 線管球への負荷を抑えている。今期は DVD-ドライブが故障したため、交換を行った。

X 線 TV 装置 (一般撮影装置) では、部品交換を必要とする故障は起きていない。モニ

ター接続部の経年劣化による縞模様などのノイズは時々現れるが、その部品が原因かはっきりしないので、接続部の部品を左右で入れ替え、その部品が原因かどうか同定を行っている。部品の同定が出来れば、交換を検討したい。メーカーによる定期点検を年2回、日常点検、暖機運転などを怠りなく実施、装置の状態を確認しながら使用している。

FPD（フラットパネルディテクタ）は1枚で運用している。透視撮影ができる特殊なもので、かなり重量がある。透視に使う時、胸部撮影をスタンドで取る時、接続部の切り替えをその都度行う。骨撮影が多くなるとパネルの重量と接続の切り替え作業で大変です。新規撮影室を考慮したい。

医療ガス

医療ガスの点検に従事することが想定されたため、あらかじめ特定高圧ガス取扱主任者（酸素）は取得していた。3ヶ月ごとにアウトレットの点検、毎日、酸素ボンベと吸引施設の点検を行っている。

診療用放射線の安全利用のための研修

放射線作業従事者である医師9名、診療放射線技師1名は、e-learningによる研修を受講。10月29日に中村伸治を講師として看護師10名、ST15名の研修会を行った。

来年の目標

通常の業務（一般撮影、CT、造影検査）はもちろん、毎日の酸素圧や吸引施設の点検、3ヶ月に一度のアウトレットの点検。一般撮影の効率化のため、補助具の作成を行いたい、VF検査における概算被ばく線量の元となるデータの取得をやり直したい、と思っています。